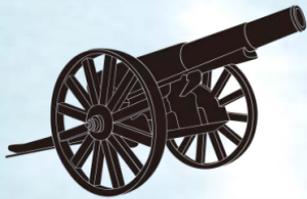
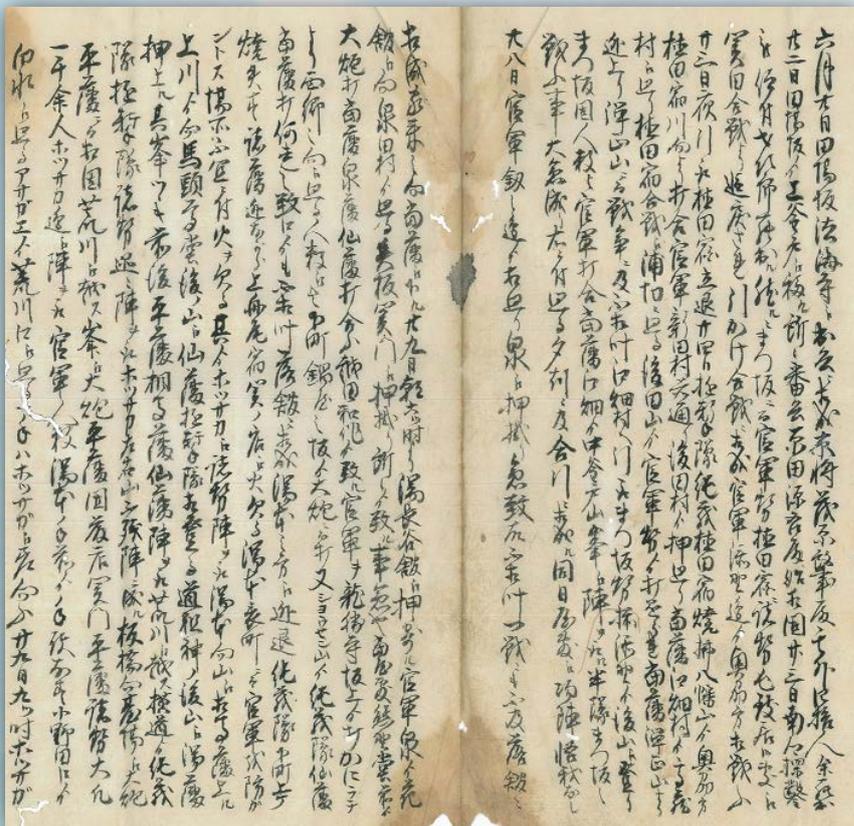


平成30年度 いわき総合図書館 企画展

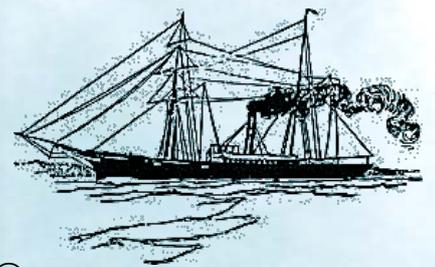
いわきの戊辰戦争



その1 平潟上陸から湯長谷城の戦いまで



岩城合戦實録



(個人蔵)

いわき市立いわき総合図書館



いわき市平字田町 120 ラトプ4・5階

TEL 0246-22-5552

<http://library.city.iwaki.fukushima.jp>

はじめに

今年、平成 30 年は戊辰戦争から 150 年、大きな節目の年に当たります。

慶応 3 (1867) 年 10 月、江戸幕府の将軍、徳川慶喜が大政を奉還、その後、12 月には王政復古の大号令が出され、新しい政権が発足しました。

しかし、江戸幕府の影響力を残そうとする勢力と、それを阻止しようとする勢力の対立が深まり、慶応 4 (明治元、1868) 年 1 月、京都の鳥羽・伏見で武力衝突、戊辰戦争が起きてしまいました。

その後、戦いは関東地方にも波及し、慶応 4 年 6 月には新政府軍が平潟 (北茨城市) に上陸し、それから約 1 か月の間、いわきの地でも戊辰の戦いが行われました。

6 月 17 日には勿来の九面で戦いが起き、6 月 28 日には泉城が落城、6 月 29 日には湯長谷城が落城しました。そして、磐城平城は 6 月 29 日、7 月 1 日、7 月 13 日の 3 回にわたって、新政府軍の攻撃を受け、落城しました。

今回の企画展示「いわきの戊辰戦争 その 1」では、いわきでの戦いのうち、新政府軍の平潟上陸から湯長谷城の戦いまでを取り上げ、紹介します。

いわき総合図書館長 夏井 芳徳

新政府軍の平潟上陸

慶応4（明治元、1868）年6月16日

慶応4（明治元、1868）年6月16日、午前10時頃、新政府軍の軍艦3艘が平潟沖に現れた。しかし、平潟には奥羽越列藩同盟の仙台藩、大江文左衛門が率いる50人ほどの部隊が駐屯し、守りに当たっていた。

さて、この時、新政府軍はどのような手段を用いて上陸を成功させたのだろうか？

その一部始終は、新政府軍の薩摩藩私領二番隊の記録「私領二番隊戦状」（『薩藩出軍戦状』）に書かれている。原文は文語体で書かれ、やや難解だ。それを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年6月14日、薩摩藩本府十二番隊、私領一番隊、私領二番隊、そして、佐土原藩、大村藩が東北地方への出撃を命じられ、富士山丸、三邦丸、飛隼丸という3艘の軍艦に乗り、品川を出港した。

2日後の6月16日、平潟沖に到着。平潟港付近の海底の地理や地形がわからないし、また、奥羽越列藩同盟軍が攻撃をしてくる恐れもあるので、沖合い約3kmのところまで船をとめた。

まず、兵士を上陸させるのに必要な小舟を手配するため、高橋金次郎、竹内慶介、伊東仙太夫、野崎平左衛門の4人に、バッテリー（船に積んである上陸用の小舟）で陸に向かうよう命令が出た。

高橋たちが陸に近づくと、小銃を持った兵士たちがいるのが見えた。しかし、高橋たちは何喰わぬ顔で、兵士たちがいるところにバッテリーを近づけ、「あなたたちは、どちらの藩の方々ですか？」と尋ねた。すると、「仙台藩だ」との答えが返ってきた。そこで、高橋たちが「私たちは日州（日向国、現在の宮崎県）の者だが、航海の途中で薪や水が底を尽き、難儀している。薪や水を補給するため、上陸したい」と伝え、「隊長に伺いを立て、許しがないと応じられない。返答を待つ間、船に戻っている」といわれた。しかし、「すぐに返答が欲しい」と、高橋たちは仙台藩の兵士たちが止めるのも聞かず、強引に陸に上がり、待機所を用意させ、そこで待つことになった。

急なことだったので、仙台藩の兵士たちは、待機所の周囲に柵を築き、高橋たちを隔離することができなかった。そのため、高橋たちは平潟の人たちを集め、沖の軍艦まで小舟を出して欲しいと頼むことができた。しかし、平潟の人たちの答えは先ほどの仙台藩の兵士と同じで、仙台藩の隊長の許しがないと、応じられないというものだった。

時間が経つにつれ、待機所の周りに仙台藩の兵士たちが続々と集まって来た。

「これはまずい、これではだめだ」

高橋たち4人は相談をし、「仙台藩からの返答を待っている余裕はない。直ちに全軍の上陸作戦を決行すべきである」との結論に達し、高橋、伊東、野崎の3人は待機所に残り、竹内だけを沖の軍艦に戻し、新政府軍の参謀に全軍上陸の決行を進言させることにした。

陸から戻った竹内の進言を受けた参謀は、全軍に上陸命令を出した。3艘の軍艦から数艘のバッテリーが降ろされ、そこに幾人かの兵士が乗り込んだ。また、竹内は自らの部隊が乗っている船に行き、偵察要員15人を選び、バッテリーに乗り込ませた。

と、その時、陸の方を見ると、何と、たくさん的小舟がこちらに向かって漕ぎ来るではないか。上陸を助けるため、平潟の人たちが小舟を出してくれたのだ。小舟は次々と3艘の軍艦に横付けされ、大量の兵士たちを乗せ、陸に向かった。

この様子を見た仙台藩の兵士たちは、怖れをなしたのだろうか、大慌てで逃げてしまった。



平潟港（茨城県北茨城市）

九面の戦い

慶応4（明治元、1868）年6月17日

慶応4（明治元、1868）年6月16日、新政府軍は平潟への上陸を成功させた。そして、翌日の6月17日、奥羽越列藩同盟軍は、その平潟を奪い返そうと、大軍を差し向けた。

朝早く、湯長谷や泉、渡辺町の新田などを出発した奥羽越列藩同盟軍は、植田を越え、鮫川を渡り、大島、安良町、関田と進み、そこで二手に分かれた。一手は、そのまま街道を南下し、平潟に向かう「勿来の切り通しルート」を進み、もう一手は、かつて勿来の関があったとされるあたりの山あいの道から平潟に向かう「勿来の関ルート」を進んだ。

戦いは昼の12時頃、勿来の九面 で始まった。激しい銃撃戦になった。しかし、新政府軍の薩摩藩私領一番隊や私領二番隊の臨機応変な対応により、形勢は新政府軍の優位に傾き、午後2時頃には勝ち負けが明らかになった。奥羽越列藩同盟軍は総崩れとなり、北へと敗走、それを新政府軍が関田、さらには安良町のあたりまで追撃した。

この時の戦いについて、仙台藩の記録「仙台藩記」（『復古外記 稿本 平潟口戦記第一』）は「十七日、文左衛門一小隊へ、泉藩半小队、遊撃隊、人見勝太郎等ヲ合テ、関田迄繰出、勿来の関ニ屯シタル官軍へ討カケタリシニ、官軍、海中ノ軍艦ヨリ頻ニ破裂弾ヲ討込タルニ付、人見等裏崩レ致シ、敗走」と書いている。

「人見等裏崩レ致シ、敗走」、つまり、人見勝太郎たちの遊撃隊が裏崩れ（前線で戦っている部隊ではなく、後続の部隊が崩れること）を起こし、敗走したという。

これに対し、遊撃隊の林忠崇（昌之助）は「林忠崇私記」（『復古外記 稿本 平潟口戦記第一』）に「遊撃隊ノ内、一隊、仙兵ヲ牽テ、平潟ノ後山ニ進ム。敵、既ニ兵ヲ配テ待居タリ。互ニ発砲ス。暫時、戦ヒケルカ、仙兵裏崩シテ、遂ニ敗走セリ」と書いている。裏崩れを起こしたのは仙台藩の方だという。

どちらが本当なのだろうか？



九面の戦い 図の解説

慶応4（明治元、1868）年6月17日、九面の戦いの様子を、「早朝」「正午頃」「午後1時頃」の3つの時間で切り取り、図に表した。

(図-1) 慶応4（明治元、1868）年6月17日、早朝。

奥羽越列藩同盟軍の各部隊が、浜街道ルートと海沿いのルートの二つに分かれ、湯長谷や新田、泉などから出撃した。

浜街道ルートを進んだのは、磐城平藩（鍋田治左衛門隊、神谷外記隊）、湯長谷藩、泉藩、仙台藩（大江文左衛門隊）、遊撃隊の部隊で、海沿いのルートを進んだのは磐城平藩（杉浦三平隊）、泉藩、遊撃隊の部隊。

(図-2) 慶応4(明治元、1868)年
6月17日、正午頃。

浜街道ルートを進んだ部隊は、植田、関田と進み、戦いの場、九面に達し、正午頃、九面の守りに当たっていた薩摩藩私領一番隊との間で戦いが始まった。

この時刻、海沿いのルートを進んだ部隊は、海上に現れた新政府軍の軍艦に備え、小浜や岩間の守りに当たっていた。



(図-3) 慶応4(明治元、1868)年
6月17日、午後1時頃。

奥羽越列藩同盟軍は山手のルート(磐城平藩(鍋田治左衛門隊)、泉藩、遊撃隊)、山手から勿来の切り通しに向かうルート(磐城平藩(神谷外記隊)、泉藩、遊撃隊)、海沿いのルート(仙台藩(大江文左衛門隊)、相馬藩)の三つのルートから新政府軍に襲いかかった。

これに対し、新政府軍は薩摩藩私領一番隊が部隊を三つに分けて応戦。平潟から棚倉に向かう道の守りに当たっていた薩摩藩私領二番隊も戦いに加わり、奥羽越列藩同盟軍を撃ち破った。

その後、薩摩藩本府十二番隊や佐土原藩、大村藩の部隊も加わり、敗走する奥羽越列藩同盟軍を安良町まで追撃した。



泉城をめぐる戦い

慶応4（明治元、1868）年6月28日

慶応4（明治元、1868）年6月28日、この日、新政府軍の矛先は泉城に向けられた。

薩摩藩の私領二番隊が先鋒を務め、私領一番隊や本府十二番隊、さらには、大村藩や備前（岡山）藩の部隊が、それに続いた。

先鋒の私領二番隊は午前2時25分に平潟を出発し、北に向かった。関田を過ぎ、蛭田川、鮫川を渡り、植田に着いた。そこからは本街道をはずれ、岩間や小浜に向かう海沿いの道を進んだ。途中、橋が落とされた川では、近くの民家から梯子2丁を借り、それを川にかけ、渡った。

その先、七回に敵が砲台を築き、待ち構えているとの情報を入手、部隊を二つに分け、正面と横合いから砲台を攻撃し、打ち破った。

その後、剣浜に進み、そこでも敵を打ち破り、泉城に向かった。

城の大手門の扉は固く閉ざされていたので、脇の窓の格子を切り破り、そこから入って、中から扉を開き、全軍が押し入った。しかし、敵兵は逃げ去った後で、城内には誰もいなかった。

七回や剣浜での戦いに敗れ、この日、城を失った泉藩の藩士たちは、翌日、湯長谷城で新政府軍と戦った。



泉城落城と新田坂の戦い 図の解説

慶応4（明治元、1868）年6月28日、早朝、新政府軍の部隊は平潟を出発。植田で朝食を食べた後、二手に分かれた。佐土原藩と柳川藩の部隊は山手の道の新田坂に進んだ。また、薩摩藩や大村藩、備前（岡山）藩の部隊は浜手の道を泉城に進んだ。

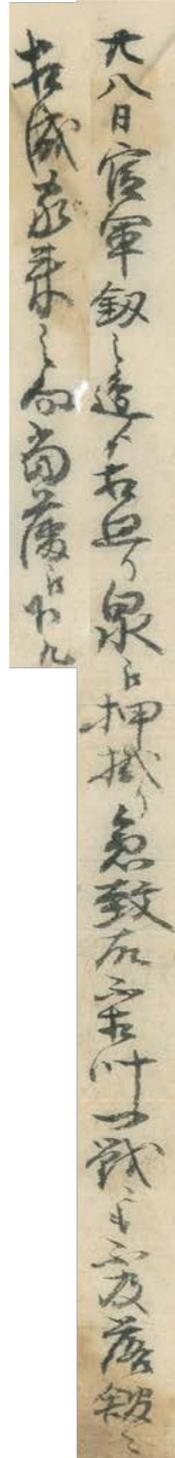
午前9時、泉城が落城。薩摩藩などの部隊は城内で休憩を取った。午前10時、泉城の西、新田坂のあたりから大砲を撃ち合う音が聞こえた。戦いが始まったのだ。泉城内で休んでいた薩摩藩などの部隊は援軍のため、急ぎ、新田坂に向かった。

前面から佐土原藩と柳川藩、そして、背後から薩摩藩や大村藩、備前（岡山）藩の攻撃を受けた奥羽越列藩同盟軍は散り散り、総崩れとなった。

岩城合戦実録

(個人蔵)

湯長谷藩の関係者が書き記した史料。



《読み》

にじゅうはちにち かんぐん つるぎ あたり あいまわ いすみ おしかか きゅうちゆえ あいかなわす いっせん およばす らくかん
 廿八日、官軍、剣の辺より相廻り、泉え押掛り、急致故、不相叶、一戦にも不及、落館に
 相成、家来之向、当藩え下る。
けらいのむき とうはん くだ

《現代語訳》

慶応四年六月二十八日、新政府軍が剣浜のあたりから回り込み、泉城に攻めかかって来た。進軍のスピードが速かったため、城に立て籠もって戦うことができず、落されてしまった。泉藩の藩士たちは湯長谷城に逃れた。

二ツ橋の戦い

慶応4（明治元、1868）年6月29日

二ツ橋の戦いは慶応4（明治元、1868）年6月29日、午前5時半前に始まった。

当初、戦況は一進一退、ほぼ互角だった。しかし、地元の人たちが富士山（「おふんちゃん」）と呼んでいる山の上に、新政府軍が大砲を運び上げ、砲撃を始めると、形勢は一気に新政府軍の有利に傾いた。仙台藩などの奥羽越列藩同盟軍は総崩れとなり、敗走を始めた。それを新政府軍の薩摩藩や大村藩の部隊が追撃した。

小名浜の西町に入ったところで、新政府軍は昼飯を食べた。そこへ、小名浜のさらに東、中之作にも仙台藩の部隊がいるとの情報がもたらされ、新政府軍は中之作に向かうことになった。中之作に向かう途中でも、何度か、戦いが行われた。

この日の戦場は、小名浜の南富岡から中之作まで、約7kmにも及んだ。また、120人を超える死者が出たとの記録も残されている。



仙台藩戦死者之碑（いわき市 小名浜）

小名浜の南富岡、藤原川に架かる二ツ橋の東岸に「仙台藩戦死者之碑」が建っている。碑には大槻文彦が書いた文章が刻まれている。その文章は次のような書き出しで始まる。

明治 戊辰 奥羽之役、仙台藩 出兵於 磐城、大隊長、富田 小五郎、参謀、安田竹之助等率部下、艤
汽船長崎丸、大江丸於松島石浜、六月廿七日、解纜、翌日、到磐城中作、上陸、達小名浜。

（現代語訳） 明治元（慶応4年、1868）年、戊辰の年に行われた奥州での戦いの折り、仙台藩はいわきに兵を出した。大隊長の富田小五郎、参謀の安田竹之助などが兵を率い、6月27日、長崎丸と大江丸の2艘の蒸気船で、松島の石浜を出港し、翌日の6月28日、いわきの中之作に上陸し、小名浜まで進んだ。

また、碑文には次のようなことも書かれている。

時、ほんどうはんへいたいらじょうにあり 本道藩兵在平城、そのさんぼう 其参謀、ふるたやまさぶろうきたりてつげていわく 古田山三郎来告曰、てききのういずみじょうをおとしまさにほくしんせんとす 敵昨陷泉城将北進。よろしくへいをすすめ 宜進兵、
ともにいずみじょうにむかう 共向泉城、かなめのほんどうをもってここにきょうげきせん 要之本道以挟撃於是。

(現代語訳) 当時、磐城平城には、陸路で、いわきに入っていた仙台藩の参謀、古田山三郎がいた。その古田がやって来て、「昨日、新政府軍は泉城を手に入れ、北に向かって軍を進めようとしている。私は北の磐城平城から、そして、あなたたちは東の小名浜から、泉城に向けて軍を進め、新政府軍を挟み撃ちにしようではないか」との作戦を提案した。

これに従い、海路、いわきに入った仙台藩の部隊は6月29日の早朝、小名浜を出立し、泉城に向かった。そして、途中、小名浜の富岡で新政府軍と対峙、戦いが始まった。その様子を碑は次のように書いている。

敵、ようちによりふかんしゃげき 抛要地俯瞰射撃、しかるに 而、わが 我、へいちにあり 在平地、みをおおうにいちもつもなし 无一物以蔽身、てき 敵、また 又、かいひんよりきたり 自海浜来、わがはいごをつく 衝我脊後、ふんうんとうらん 紛紜闘乱、
てんめいよりにつちゅうにいたる 自天明至日中、ほうじゅうあいうち 砲銃相撃、ししょうかぞえるなし 死傷無算、ついにへいをおさめ 遂収兵、おな 小名浜経、なかのさくにしりぞき 中之作退、よつくらにつぐ 次四倉。

(現代語訳) 新政府軍は山の上の砲台から、見下ろすようにして攻撃してきた。我が軍は平坦な場所に構えたため、身を隠すところがなかった。また、新政府軍は浜の方からも攻めて来て、我が軍の背後を突いた。そのため、我が軍は散り散りになってしまった。早朝から昼頃までの撃ち合いで、多くの死傷者が出、ついに我が軍は引き揚げ、小名浜から中之作、さらには四倉まで敗走した。

湯長谷城の戦い

慶応4（明治元、1868）年6月29日

慶応4（明治元、1868）年6月29日、新政府軍による湯長谷城攻撃の様子は、備前（岡山）藩の記録「岡山藩記」（『復古外記 稿本 平瀧口戦記第一』）に詳しく書かれている。

近傍致探索候処、賊徒、矢板坂ノ陰ニ據リ、抗拒之越相聞候ニ付、当藩人数半小隊余、嚮導召連、泉田村ヨリ間道ヲ経テ、右、矢板坂之西北隅ニ出、小山ニ據リ、本道兵ト夾撃、横矢払ニ撃立候処、賊徒、敗走、湯長谷之方へ雪崩レ候ニ付、北ヲ追ヒ、湯長谷へ攻寄候処、賊徒、三ヶ所之砲台ヨリ、大小砲乱射、雨注、両藩合隊頗烈戦、夫ヨリ佐土原藩ハ搦手へ進ミ、当藩ハ大手へ向ヒ、蟹内橋ニテ暫ク接戦、砲台攻抜キ、終ニ陣屋ヲ乗取候、折柄、搦手之佐土原藩モ攻登リ申候。時、既二十二字、両藩兵糧ヲ相喫シ、暫時、休憩。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

近辺を探索すると、奥羽越列藩同盟軍が矢板坂で待ち構えていることがわかり、備前（岡山）藩の半小隊は道案内の者を連れ、泉田村から脇道を進み、矢板坂の西北隅の小山から攻め、本道を進んだ部隊と敵を挟み撃ちにした。敵の横合いから銃撃を加えると、敵は湯長谷城に向かい、雪崩れを打って敗走した。

それを追いかけて、湯長谷城に攻め寄せると、敵は3か所の砲台から、大砲や小銃で応戦してきた。砲弾や銃弾が雨のように飛んで来る、激しい戦いになった。

その後、佐土原藩は搦手に、備前（岡山）藩は大手に進撃した。

大手に進んだ備前（岡山）藩は、藤原川にかかる蟹打(内)橋を挟んで撃ち合い、ついには砲台を攻め落とし、城内に入った。同時に、佐土原藩も搦手から城内に入った。時刻は既に昼の12時、両藩は城内で昼飯を食べ、暫時、休息した。

この日の湯長谷城での戦いの様子は、湯長谷藩側の記録『岩城合戦実録』にも書き残されている。

廿九日、朝六つ時より、湯長谷館へ押寄せる官軍、泉より花館へ向い、泉田より廻る。矢板関門へ押掛り、所々より致る事、急也。当屋敷、熊野堂前より、大砲打ち、当藩、泉藩、仙藩、打合。越田和作より致る官軍を龍勝寺坂上より打ち、かにウチより西郷の向へ廻る人数へは、下町鍋屋の坂より大砲にて打つ。又、シヨウセン山より純義隊、仙藩、当藩、打つ。何れの致口よりも相叶わず、落館に相成り、湯本の方へ逃げ退く。

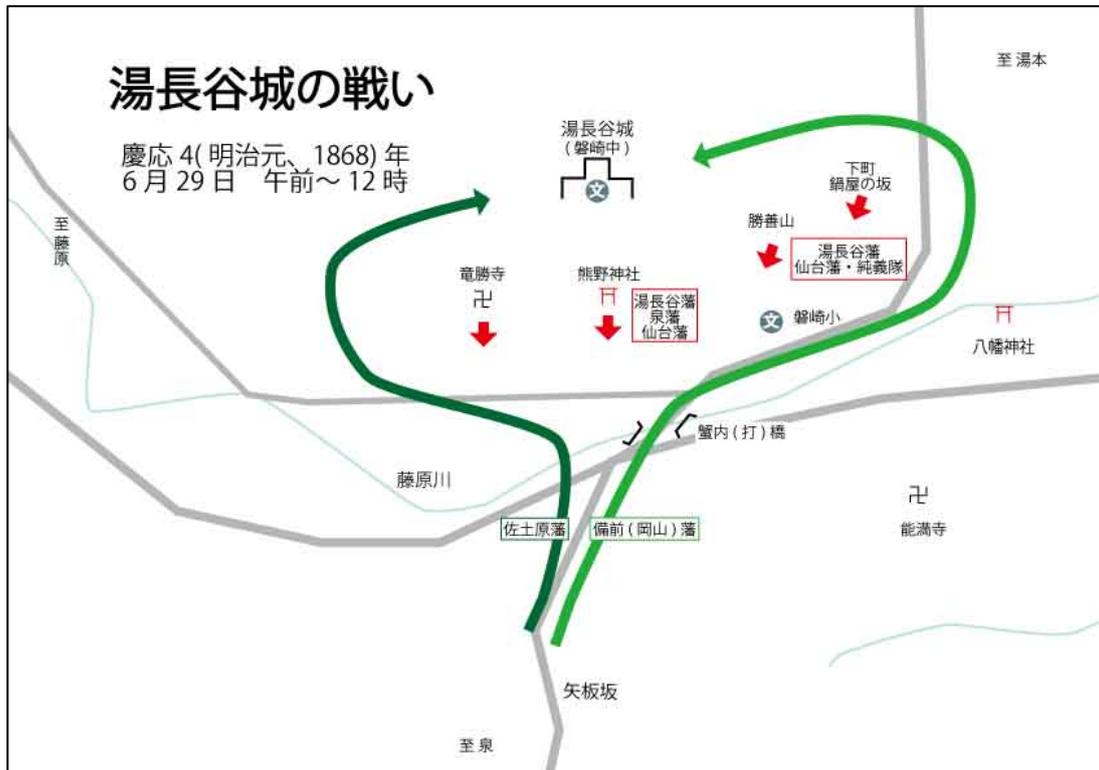
これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年6月29日、夜明け時、湯長谷館（城）に向かう新政府軍は、泉から花館（花立）を通り、そこから泉田に出て、矢板坂に築かれた奥羽越列藩同盟の関門を襲った。攻撃は複数の箇所から行われ、関門はあっという間に破られた。

その後、湯長谷館（城）を攻撃した。湯長谷藩や泉藩、仙台藩が湯長谷館（城）の熊野堂の前から大砲を打ち、応戦した。

また、越田和作（越田作）から攻め寄せる新政府軍の部隊に対しては、龍勝寺の坂の上から砲撃し、かにウチ（蟹打、蟹内）から西郷の向かい側の方に進む新政府軍の部隊に対しては、下町の鍋屋の坂から砲撃を加えた。さらに、シヨウセン（勝善）山からも、純義隊や仙台藩、湯長谷藩が攻撃をした。

しかし、いずれの場所の戦いでも敗れ、湯長谷館（城）は落とされ、湯本へと逃げ退いた。



湯長谷城の戦い 図の解説

慶応4（明治元、1868）年6月29日、湯長谷城に攻め寄せた新政府軍は、佐土原藩と備前（岡山）藩の部隊だった。

矢板坂の関門で奥羽越列藩同盟軍を破り、一気に湯長谷城に迫った。

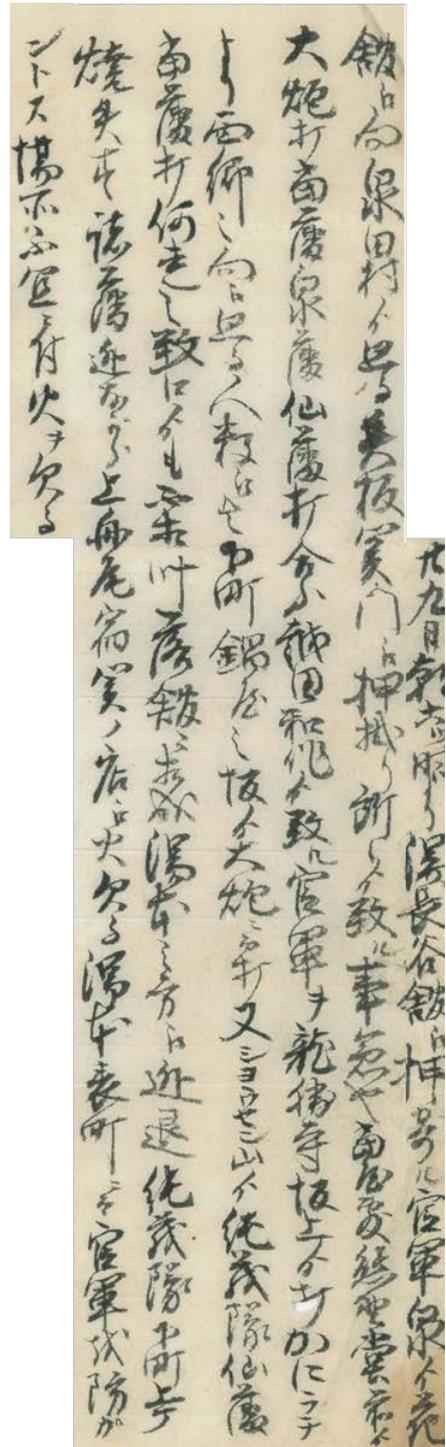
湯長谷城を守っていた奥羽越列藩同盟軍は、湯長谷藩、泉藩、仙台藩、そして、純義隊の部隊だった。城内に築いた砲台などから激しい攻撃を行った。

しかし、大手（東側）と搦手（西側）から攻め寄せる新政府軍の進撃を止められず、昼の12時頃、湯長谷城は落城した。

岩城合戦実録

(個人蔵)

湯長谷藩の関係者が書き記した史料。



《読み》

廿九日、朝六つ時より、湯長谷館え押寄る官軍、泉より花館え向、泉田村より廻る。矢板関門え押掛り、所々より致る事、急也。当屋敷、熊野堂前より大砲打、当藩、泉藩、仙藩、打合ふ。越田和作より致る官軍を龍勝寺坂上より打、かにウチより西郷の向え廻る人数えは、下町、鍋屋の坂より大砲にて打。又、シヨウセン山より、純義隊、仙藩、当藩、打。何れの致口よりも不相叶、落館に相成、湯本の方え逃退。純義隊、下町、上町、焼失す。諸藩、逃ながら、上舟尾宿、関の店え火欠る。湯本、表町にて官軍を防がんとす。場所、不宜に付、火を欠ける。

《現代語訳》

慶応四年六月二十九日、日の出の頃、湯長谷城を攻撃するため、新政府軍の部隊が泉城を出発し、花館(花立)に向かい、泉田を廻って、矢板関門に押し寄せ、さまざまなところから激しく攻撃してきた。

湯長谷城では湯長谷藩や泉藩、仙台藩が熊野堂の前から大砲を撃ち、戦った。また、越田和作から攻め寄せる新政府軍の部隊に対しては、龍勝寺の坂の上から攻撃をした。また、蟹打から西郷の向かい側に廻り込もうとする新政府軍の部隊に対しては、下町の鍋屋の坂から大砲を撃って攻撃した。さらに、勝善山からは純義隊と仙台藩、湯長谷藩が攻撃した。

しかし、いずれの箇所でも、新政府軍の進撃を止めることができず、落城となり、湯本の方に逃げ退いた。この時、純義隊が湯本の下町と上町に火を付け、燃やした。また、各藩の部隊も逃げながら、上舟尾宿や関の店に火を付けた。また、湯本の表町で、新政府軍の進撃を食い止めようとしたが、場所が適当でなかったため、そこにも火を付けた。

戊辰戦争年表

西暦	年号	主な出来事	
1867	慶応 3	10月	大政奉還
		12月	王政復古の大号令
1868	慶応 4 (明治 元)	1月 3日	鳥羽・伏見の戦い
			戊辰戦争が始まる
		1月 8日	徳川慶喜ら海路で大阪から江戸へ
		1月 9日	明治天皇即位
		3月	五箇条の御誓文が出される
		4月 11日	江戸城無血開城
		6月 16日	新政府軍、平潟上陸
		6月 17日	九面の戦い
		6月 18日	笠間藩、神谷陣屋を追い出され、薬王寺に移る
		6月 26日	笠間藩の援軍が笠間を出発
		6月 28日	泉城落城
			新田坂の戦い
		6月 29日	二ツ橋の戦い
			湯長谷城落城
			堀坂の戦い
		7月 1日	第二次磐城平の戦い
		7月 3日	笠間藩、薬王寺を追い出され、八茎に移る
		7月 8日	笠間藩の援軍、八茎到着、合流
		7月 10日	七本松の戦い
		7月 13日	第三次磐城平の戦い
			磐城平城落城
8月 23日	鶴ヶ城籠城戦始まる		
	白虎隊士飯盛山で自刃		
9月 8日	明治に改元		
9月 22日	会津藩降伏		
9月 24日	磐城平藩、湯長谷藩、泉藩降伏		

>>> 関 連 資 料 <<<

- ◆ 『安藤対馬守信睦公』 いわき歴史文化研究会 // 編
磐城平藩主安藤家入部二五〇年記念事業実行委員会 2006 (K/210.5-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 // 編 いわき市 1975 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第9巻 近世資料』 いわき市史編さん委員会 // 編 いわき市 1972 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『磐城三藩の戊辰戦争』 改訂増補版 上妻又四郎 // 著 雄峰舎 2018 (K/210.6-1 /ア)
- ◆ 『磐城三藩明治戊辰戦争余聞』 斉藤笹舟 // 著 東海岸郷土史蹟研究会 1940 (K/-210.6-1-サ)
- ◆ 『いわき市勿来地区地域史 1 自然環境／原始～古代～中世～近世／民話』
いわき市勿来地区地域史編さん委員会 2012 (K/210.1-1/イ-1)
- ◆ 『磐城平藩戊辰實戦記 藩士十六人の覺書』 小野一雄 // 編著 平安会 2013 (K/210.6-1 /オ)
- ◆ 『いわきの戊辰戦争』 夏井芳徳 // 著 纂修堂 2018 (K/210.6-1 /ナ)
- ◆ 『磐城戊辰史』 本多忠緯 // 編 明治百年記念事業磐城推進委員会 1968 (K/210.6-1 /イ)
- ◆ 『奥州巡礼・佐土原飛脚』 水澤松次・青山幹雄 // 編 第二巧版 1994 (K/210.6-1 /ミ)
- ◆ 『寛斎日記』 斉藤省三 // 編 陸別町教育委員会 1982 (K/915.5 /カン)
- ◆ 『舊平藩戊辰殉難者追憶』 三村直次 // 編 安藤家 1967 (K/210.6-1 /キ)
- ◆ 『薩藩出軍戦状 1』 日本史籍協会 1972 (K/210.6-0 /サ-1)
- ◆ 『関寛斎 奥羽出張病院日記 解説本』 関内幸介 // 解説 陸別町教育委員会 2016 (K/915.5 /セキ)
- ◆ 『内藤政憲家記』 内藤政憲 // 著 [1878] (K/288/ナ)
- ◆ 『復古記 第13冊』 東京大学史料編纂所 // 編 東京大学出版会 1975 (K/210.6-0 /フ)
- ◆ 『戊辰私記』 味岡礼質 // 編 平読書クラブ 1975 (K/210.6-1/ボ)
- ◆ 『戊辰役戦史 上』 大山 柏 // 著 時事通信社 1988 (K/210.6-0/オ-1)
- ◆ 『松村病院史 第1巻』 松村病院史編集委員会 // 編 磐城済世会 2003 (K/498/マ-1)
- ★ 「明治150年」ポータルサイト (内閣官房「明治150年」関連施策推進室)
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>
- ★ 「明治150年」関連施策 (福島県)
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11025b/tiikishinkou-131.html>



平成 30(2018)年 6 月 25 日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館

企画展「いわきの戊辰戦争 その1」－平瀨上陸から湯長谷城の戦いまで－

■会期 平成 30(2018)年 6 月 26 日(火)－10 月 28 日(日)

■会場 いわき総合図書館 5 階 企画展示コーナー